

中国から東南アジア大陸部へ移住した民族：企画展『アジアの境界を越えて』に寄せて

著者	塚田 誠之
雑誌名	なら・シルクロード
巻	14
ページ	3-3
発行年	2011-06-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5141

寄稿

「中国から東南アジア大陸部へ移住した民族
— 企画展『アジアの境界を越えて』に寄せて」

国立民族学博物館 先端人類科学研究部 塚田 誠之
中国では人の移住が頻繁に行われた。漢族が南方へ勢力を拡大し、非漢族が玉突き状に押し出されて中国から東南アジアへと移住の途につく趨勢にあった。また、中国王朝の統治の浸透や、近現代の国民国家成立の動き、さらに東西冷戦も移住の動因として挙げられる。さらに、生業としての焼畑耕作による移住も見られた。この結果、中国と東南アジア大陸部に国境を隔てて同じ、あるいは同系の民族が多数居住することになった。こうした民族を「跨境民族」と呼ぶ。本稿では国立民族学博物館企画展『アジアの境界を越えて』で扱ったモン族（中国ではミャオ族）、ミエン族（ユーミエンともいう。中国ではヤオ族）、ラフ族を取り上げて、移住の実態、移住に対する認識、移住後の文化変容を概観する。

モン（Hmong）族の移住は、漢族や清朝の圧迫、焼畑耕作によって行われた。かつてラオス・タイ・ミャンマーにまたがる「黄金の三角地帯」でアヘンケシを栽培していたことはよく知られている。注目されるのはモン族の一部が現代の東西冷戦の影響を受けて移住したことである。1950年代末からのラオスでの内戦によって、モン族は軍事介入をした米軍側について左派勢力のパト・ラオと戦い、敗れて難民としてタイ、欧米各地へ逃れた。

西南中国から東南アジア大陸部にかけて住む民族は銀を貴重品とした。モン族も同様で、移住後も銀細工の技術を保っている。かつて結納金として贈られ、現在も衣装に銀貨やそれを模した硬貨が装飾品として付けられる。竹の吹奏楽器「蘆笙」は、正月や冠婚葬祭の際に演奏される。かつては自家製の麻布にろうけつ染めを施した衣装を着用したが、現在は化学繊維やプリント柄の生地が回り、既製服として商品化されている。

次いでミエン（Mien）族は、焼畑耕作によって移住した。現在は常畑・水稻や果樹などの栽培が行われている。台湾や韓国に出稼ぎに行く場合もある。注目すべきは、自らの由来や中国皇帝が賜与したという特権を漢字で書いた文書『評皇券牒』である。その昔、靈犬槃瓠が、中国皇帝のために戦功を立て、褒美として皇帝の娘を娶った。夫婦の間に生まれた子供たちが互いに縁組をしてその子孫がミエン族となった。皇帝は彼らに官位を与え、租税を免除し通行の自由を保証した。この文書は彼らにとって祖先は中国皇帝と関係があるという由緒を示すもので、アイデンティティのよりどころとして維持されてきた。最近では文化復興運動のなかで、文化遺産として見直され、民族的統合のシンボルとなっている。

ミエン族は道教を受容するなど漢族の影響を受けてきた。ただし、「掛燈」（クワタン）などの儀礼は、ミエン族の場合すべての成員が成人儀礼として通過することを原則としており、漢族の場合と異なっている。漢族の影響を受容しながらも自らの社会に合うように改変を加えたのである。また、モン族同様、銀を重視したが、結納金のほか、冥土に霊界の政府があり、そこで死後に地位を得るために銀を貯め功德を積むという観念があった。

最後にラフ（Lahu）族であるが、漢族と清朝に追われて雲南を離れて移住を開始し、ビルマの英領化にともなってタイへ移住した。中華人民共和国の成立にともなって国民党軍に従って移動し、現代冷戦史の最前線を担わされたという政治的な側面もある。注目すべきは、キリスト教へ集団的に改宗する動きが見られたことである。また、移住の途上で、赤ラフというサブグループが形成されたことも見逃せない。文化変容について、移住先でタイの影響を受けたものは皿に飯を盛りスプーンを使うが、伝統を留めるものは茶碗に飯を盛り箸で食べる。ラフ族のように一つの民族に下位集団が見られ、またクリスチャンと非クリスチャンが共存するなど移住によって複雑な様相を呈するようになった。どの民族にも移住前の習俗が残されており、たとえば正月にブタ・鶏を殺しモチをついて祝う。

このように境界を越える移住がどのように行われ、そのことによって文化や意識がどう変化したのか、あるいは変化しないのか、具体例に即して検討することは国際理解にとっても、現代社会の理解にとっても、意味のあることである。



展示場の一コマ